

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

聖ヤコブと柱の聖母の相補的關係に関する 一考察 -中近世のアラゴン巡礼者を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福地, 恭子, FUKUCHI, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2307

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



聖ヤコブと柱の聖母の相補的關係に関する 一考察 -中近世のアラゴン巡礼者を中心に-

福地 恭子

1. はじめに

スペイン北西部に位置するキリスト教の聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラ（以下「コンポステーラ」と称する）大聖堂には、サンティアゴ（聖ヤコブ）の遺骸が祀られている。この聖ヤコブに詣でる巡礼がサンティアゴ巡礼と呼ばれ、中世において、ヨーロッパ中から多くの巡礼者を集めた。最盛期には年間 50 万人を上回ったと言われる¹。だが、近世に入ると、巡礼者数は減少の一途を辿る。まず、16 世紀は、ルターの宗教改革、ロッテルダムのエラスムスの巡礼批判、異端審問などの影響によって、主にイギリス、フランス、ドイツからの巡礼者が減少する²。また、1589 年には、聖ヤコブの遺骸が隠匿され、その後、所在が分からなくなった³。コンポステーラで聖遺物を目にできないことは、聖遺物崇敬に熱心な人々の巡礼に対する動機を低減させた。17 世紀は、30 年戦争（1618～48 年）、ピューリタン革命（1642～49 年）、カタルーニャの反乱（1640～59 年）などの戦争や内乱が相次ぎ、また飢饉や疫病が発生した危機の世紀であった。こうした危機によって人や物の移動が制限され、これに伴いサンティアゴ巡礼のような長距離巡礼へ向かう巡礼者は減っていった。この流れは 18 世紀に入っても変わらず、巡礼者の減少に歯止めがかかるとはなかった⁴。

1 ノルベルト・オーラー『巡礼の文化史』井本 响二・藤代 幸一訳 法政大学出版局 2004 年 pp. 23-24.

2 Vázquez de Parga y otros, *las peregrinaciones a Santiago de Compostela*, Tomo I, Pamplona, 1993, Gobierno de Navarra, pp. 111-115.

3 スペイン王フェリペ II の聖遺物収集癖、またイギリスの海軍提督フランシス・ドレークの略奪から逃れるために隠されたとされる。聖ヤコブの遺骸は、280 年後の 1879 年にコンポステーラ大聖堂で再発見された。

4 中近世のサンティアゴ巡礼に関する研究は、バスケス・デ・パルガ Vázquez de Parga, Luis, Lacarra, J. M. y Uría Riu, J., *Las peregrinaciones a Santiago de Compostela*, Tomo I~III, CSIC, Madrid, 1948 に多く拠っている。

また近世では、スペインの聖ヤコブ崇敬の伝統を揺るがす3つの論争が巻き起こった。第1は、1574年にカスティーリヤの5司教区（ブルゴス、オスマ、カラオラ、バレンシア、サングェンサ）において、聖ヤコブ誓約 *Voto de Santiago*⁵ に対する支払は不当であると訴えが起こされたこと、第2は、ローマ教皇クレメンス8世 *Clemente VIII*（在位 1592～1605年）が歴史家のバロニウス *César Baronio* の書を基に、聖ヤコブによるスペインでの布教活動が誤りであることを指摘し、「使徒たちの祈祷書 *Breviarium Apostolorum*」から聖ヤコブの布教活動を削除するように指示したこと、第3は、カルメル会が近世の守護聖者に相応しいのは聖女テレサであるとスペイン王やローマ教皇に承認を求め、実際に1618年と1627年に聖女テレサがスペインの守護聖者になったことである⁶。これらの論争は、聖ヤコブに対する崇敬心が薄れてきたものとして捉えられている。

しかしながら、17・18世紀の建築、図像、書を見ると、それに疑問を抱かざるを得ない事実がいくつも見られる。例えば、次の3つを挙げることができる。第1に、巡礼者がほとんど訪れなかったとされる18世紀に、コンポステーラ大聖堂はヨーロッパ最大の傑作とされる2本の高塔を備えた西ファサードを作っている⁷。第2に、モーロ人殺し聖ヤコブは対抗宗教改革の禁止対象になりながらも、現存する図像や彫刻のほとんどが17世紀以降に制作されている⁸。第3に、12世紀の『カリクスティヌス写本』以降、初めて聖ヤコブに関して取り上げたカステジャ *Mauro Castellá Ferrer* の書『聖ヤコブの歴史 *Historia del Apóstol de Jesús Cristo Santiago Zebedeo, Patrón y Capitán general de las Españas*』（1610年）が17世紀に刊行されている⁹。これらから、近世においても、サンティアゴ巡礼、聖ヤコブ崇敬は人々に支持されていたことを窺い知ることができる。よって、近世の聖ヤコブ巡礼や崇敬を改めて再検証する必要があるだろう。そのためには、これまでの主流であるコンポステーラやフランスの道 *Camino Francés*

5 クラビーホの合戦でキリスト教軍を勝利に導いた聖ヤコブへ感謝を表すための現物課税である。*Voto de Santiago* の日本語訳は、田辺(2016)による。

6 Lidwine Linares, *Leyenda y figura de Santiago en dos hagiografías de principios del siglo XVII: Mauro Castellá Ferrer y Hernando Ojea Gallego y sus Historias del Apóstol Santiago*, *FRAMESPA*, Presses universitaires Le Mirail, Toulouse, <https://hal.archives-ouvertes.fr/Halshs-00084008/document> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

7 ノルベルト・オーラー, *op. cit.*, p. 34.

8 田辺加恵「「マタモロス聖ヤコブ」像の形成とその戦略的利用」『スペイン史研究』第30号 *スペイン史学会* 2016年 p. 27. Denis Péricard-Méa, *Santiago, del apóstol al Matamoros, Saint JacquesInfo* [En ligne], Saint Jacques un et multiple, Le saint politique, mis à jour le : 22/02/2016, <http://lodel.irevues.inist.fr/saintjacquesinfo/index.php?id=1333> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

9 ガリシア・セラノーバ出身のカステジャは、軍人であり、作家でもあった。フライ・ルイス・デ・レオンの弟子の1人である。

を通した検証方法ではなく、他の側面から探る必要がある。その1つが、アラゴン地域の巡礼研究を基にした検証方法である。

近年、エブロ川地域の巡礼研究が進んできている。たとえば、アグスティン・ウビエト Agustín Ubieto Arteta の書を挙げるができる¹⁰。これは、11世紀から19世紀初頭（1835年永代所有財産解放令まで）にかけてアラゴン地方を訪れた巡礼者2517人の出身地、出発地、目的地、職業を基に、各時代の巡礼者数の推移や目的地の変化、巡礼時に命を落とした人々の埋葬先、各地域での巡礼者の足跡、巡礼に影響を与えた社会的要因等の詳細なデータと、手書きの地図やグラフなどが含まれた704ページに及ぶ書である。

近世の巡礼者がアラゴン地方を訪れた目的は、サラゴサの柱の聖母教会 *Basílica de Nuestra Señora del Pilar* で柱の聖母に祈りを捧げるためである。柱の聖母とは、聖ヤコブがサラゴサでの布教活動中に会った聖母として伝えられている。中世で生まれた柱の聖母の伝承は口伝で広まり、やがて、図像にも表象されるようになった¹¹。特に、17世紀は柱の聖母を主題とした書が続々と刊行されるようになり、この頃から柱の聖母は、人々の崇敬心を一心に集めるようになったことが分かる。また、柱の聖母への巡礼は、当初はアラゴン地域周辺の人々による小規模なものであったが、17世紀には遠方から巡礼者が訪れる大規模なものへと成長した。

アグスティン・ウビエトは、アラゴンに入る全巡礼者の約6割が、コンポステーラへの往路またコンポステーラからの復路でサラゴサを訪れていたとして、サラゴサとコンポステーラの繋がりを巡礼の側面から指摘している。注目すべきは、この2地点を結ぶ巡礼が興隆したのが、サンティアゴ巡礼者の減少と論争の激化が見られる17世紀・18世紀であり、聖人崇敬から聖母崇敬への移行があったと指摘される時期と重なる点である¹²。近世の柱の聖母崇敬は、中世の聖ヤコブ崇敬からの転換として位置づけられることもある¹³。だが、そのような時期にコンポステーラとサラゴサの2地点が巡礼を通して繋がっているのであれば、柱の聖母は聖ヤコブ崇敬からの移行であるとは考えにくい。むしろ、柱

10 Agustín Ubieto Arteta, *Camino Peregrinos de Aragón*, CSIC, Zaragoza, 2016, <http://ifc.dpz.es/publicaciones/ver/id/3478> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

11 柱の聖母をモチーフとした最古の絵画は、1490年のマエストロ・デ・ルエシア Maestro de Luesia による作品である。聖母マリアが柱の上に立ち、柱の周りを聖ヤコブと7人の信者が取り囲んでいる。聖ヤコブは、サラゴサでの聖母の出現に感謝し、一心に祈りを捧げる尊い聖人として描かれている。

12 関哲行『スペイン巡礼史―「地の果ての聖地」を巡る―』講談社現代新書 2006年 p. 105.

13 Belén Boloqui Larraya, *las rutas por el valle del Ebro. El Camino jacobeo del Ebro, Los caminos de Santiago: Arte, Historia y Literatura*, CSIC, Zaragoza, 2005, p. 99.

の聖母は、論争によって存続の危機に瀕する聖ヤコブの伝統を守る1つの根拠として、サンティアゴ巡礼と聖ヤコブ崇敬を支えていた可能性が浮かび上がってくる。

よって、本稿では、中世の聖ヤコブ崇敬の興隆によって誕生した伝承の柱の聖母が、後に崇敬対象として大きな発展を遂げたことで、近世で危機的状況に陥っていた聖ヤコブの伝統を保護する役割を担ったことを、主に巡礼を通して明らかにすることを目的とする。

2. 聖ヤコブ伝承に表れる柱の聖母

イエス、聖母マリアと並び、聖ヤコブはスペインでは古くから崇敬されていた。近年の研究では、コンポステーラの地下礼拝堂で、紀元約2世紀に刻まれたとされる3人の名が確認されている¹⁴。初期キリスト教時代から聖ヤコブに加護を求めていた人々の崇敬心は、中世になると図像に反映された。マールは、13世紀初期には貝殻で飾られたパン袋を持つ以外、他の使徒とあまり違いがなかった聖ヤコブが、14世紀に入ると杖を持って帽子を被り、15世紀になると大きな帽子と旅行用のマントで身を包んだ巡礼者の姿に変化したと述べる¹⁵。また、聖ヤコブはモーロ人との合戦の場において、白馬に跨り、剣と旗を持ち、キリスト教軍を勝利に導くモーロ人殺し聖ヤコブへと変化を遂げた。

こうした図像と共に、幾つかの聖ヤコブの伝承が生まれた。伝承は次の5つに分類できる。①スペインでの布教活動、②スペインへの遺骸の移葬、③9世紀の墓の発見、④巡礼路での巡礼者の救済、⑤レコンキスタの合戦におけるキリスト教軍の救済である。この中で①の布教活動に関する伝承は近世に入って、より具体的に、より詳細になるよう加筆が加えられた。では、まず、中世において、どのように聖ヤコブの布教活動が取り上げられているのか、13世紀のウォラギネ Santiago de la Vorágine の『黄金伝説 *Leyenda dorada*』を引用する。

ゼベダイの子の使徒ヤコブは、主のご昇天後ユダヤとサマリアの地を伝道して歩き、その後主のみ言葉をひろく伝えるため、スペインに渡った。しかし、成果があがらず、この地で得た弟子はわずか9人とどまったので、そのうちの2人を伝道のためにスペインにのこし、

14 Abraham Coco, Enrique Alarcón: «En el siglo II ya se rendía un culto funerario al Apóstol en Santiago», *ABC Galicia* (España: 2 de octubre de 2016), http://www.abc.es/espana/galicia/abci-enrique-alarcon-siglo-rendia-culto-funerario-apostol-santiago-201610021210_noticia.html (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

15 エミール・マール『中世末期の図像学』 上 田中仁彦他訳 国書刊行会 2000年 p. 245.

あとの7人をつれてユダヤへ帰った。ヨハネス・ベレトは、ヤコブがスペインで改宗させて得た弟子はたった1人であったとさえ書いてある。¹⁶

『黄金伝説』が書かれた同時期、聖ヤコブの布教活動の伝承に、被昇天前の聖母マリアが柱を持って出現して聖ヤコブを励ますという新たな聖母マリア像が加えられた。その聖母マリアは柱と共に出現したため、柱の聖母と呼ばれるようになった¹⁷。その後、口伝で広まっていき、近世に入ると、16世紀末から17世紀末までの1世紀をかけて、柱の聖母を崇敬する聖職者たちの手によって柱の聖母の伝承は完成されていく。多くの書が刊行され、その代表作が、ムリーリョ Diego Murillo¹⁸の『柱の聖母と天使の礼拝堂の設立 *Fundación milagrosa de la capilla angelica y apostolica de la madre de Dios del Pilar y excelencias de la ciudad de Çaragoça*』(1616)、アグレダ María Jesús de Ágreda¹⁹の『神の神秘的な町 *Mítica Ciudad de Dios*』²⁰(1670)、最後に、その集大成と言える作品が、アマダ Josep Félix Amada²¹によって書かれた『奇跡録 *Compendio de los milagros*』(1680)である。彼らは、柱の聖母がより感動的で印象的になるように、布教活動の伝承に創作を加えた。現在、我々が知る柱の聖母の伝承は、主にアマダの書に依拠している。では、アマダの『奇跡録』から布教活動のくだりを引用する。

聖ヤコブはエルサレムから布教のためにスペインに来た。アストゥリアスを通り、オビエドの町に行き、1人を改宗した。そして、ガリシアに入り、パドロンの町で布教活動を行った後、カスティージャを通り、最後にアラゴンを訪れた。そこはエブロ川が流れるサラゴサで

16 ウォラギネ、デ・ヤコブス 『黄金伝説』第1巻 前田敬作・今村孝訳 平凡社 2006年 pp. 468-469.

17 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, p. 99. ボロキは、柱の起源を、樹木を崇拝する「生命の樹」と呼ばれるキリスト教以前の異教の思想が、後に、聖母、柱、聖ヤコブと関連づけられたと推察する。

18 ムリーリョはアラゴン出身のフランシスコ会の神父である。アラゴン県において、教会の様々な要職を歴任した。フェリペ2世の葬儀、サンタ・テレサの列福式に参列した。

19 ソリア出身のアグレダは、ソリアにある無原罪のマリア修道院の修道女であった。アグレダは聖母マリアを幻視し、啓示を受けることができたと言われる。

20 『神の神秘的な町』はアグレダの幻視を通して書かれた神秘的な物語である。

21 アマダは、カタルーニャのレリダ出身である。1680年にサラゴサの柱の聖母教会の司教座聖堂参事会員に任命された。アマダは、柱の聖母教会の建築が始まったことに感謝し、『奇跡録』をカルロス2世に献上した。『奇跡録』には、23話の奇蹟譚が収められている。

あった。

聖ヤコブは何日もかけ、布教活動を行ったが、改宗できた信者はわずか8名であった。ある晩、その信者らに神の世界を語るために、町の喧騒を避けて、(エブロ)川の河畔に出かけた。その場所で数日過ごした後、夜中、祈り疲れて信者が寝た。その時に、聖ヤコブは「アヴェ・マリア、恵みに満ちた方」と祈る天使の声を聴く。聖ヤコブはすぐにその場に跪くと、聖母マリアが現れた。1000人の天使たちが2つのコーラス隊に分かれ、その中心に大理石の柱が置かれた。

天使たちが「主をほめたたえよ」を祈った後、聖母マリアは聖ヤコブにこう言った。「私の大事な聖ヤコブ、ここは私のための場所です。私が座るこの柱を見なさい。これは天使がキリストのいる天から運んできたものです。この周りに祭壇を作りなさい。この場所は、私の名前で助けを求めた人のために、私を介して、奇蹟を起こす場所です。柱はこの世界の終わりまであり続けるでしょう。そして、この町のキリスト教信者は無くなることはないでしょう。」聖ヤコブはキリストと、聖母マリアに限りない感謝をした。

聖ヤコブはこの素晴らしい出来事を喜び、早速、その場所に信者たちと教会を建てた。祭壇は縦に16歩、横に8歩あり、聖母マリアの指示通り、主祭壇はエブロ川に向いて作られた。聖ヤコブは、信者の1人を司祭に任じた。教会を建てた後、聖ヤコブは信者たちと別れ、ユダヤの地に戻り、布教活動を続けた。聖ヤコブによって建てられた教会は、柱の聖母教会と名付けられた。この教会は聖母マリアのために、使徒の手で建てられた初めての教会である。²²

この伝承において、特に注目すべき点は、この頃、聖母マリアはエフェソスにおいて存命中であり、この出現が被昇天前の聖母マリアであったということである。聖母マリアの出現はヨーロッパ各地に伝承として残るが、それは全て被昇天後の聖母マリアである。柱の聖母は、たとえ伝承上とはいえ、被昇天前の唯一の出現であり、さらに、この時に聖ヤコブによって建てられた教会は、史上初めて聖母マリアに捧げられた教会であると語られている。柱の聖母の伝承があることによって、サラゴサは聖ヤコブと聖母マリアとの強い結び付きを表すことができる。では、なぜ、コンポステーラから遠く離れたサラゴサで、

22 Josep Félix Amada, *Compendio de los milagros de Nuestra Señora del Pilar de Zaragoza*, Zaragoza, 1796, pp. 22-25. 筆者訳

聖ヤコブ伝承の1つとして柱の聖母が生まれたのであろうか。サラゴサで柱の聖母の伝承が誕生した背景を探るために、次に、柱の聖母伝承に関する成立の歴史を取り上げる。

3. 伝承成立の歴史

柱の聖母の伝承は、柱の聖母教会の古文書保管所で保管されていた13世紀末から14世紀の始めのグレゴリオス1世 San Gregorio Magno (在位590年～604年)の『ヨブ記註解 *Moralia in Job*』が出典であるとされる²³。13世紀は、グラウスのラ・ペニャの聖母 La Virgen de la Peña, ベルチテのプエヨの聖母 la Virgen del Pueyo, ソリアの エスピノの聖母 la Virgen del Espino など様々な聖母崇敬が興隆した時期でもある²⁴。アルフォンソ10世賢王 Alfonso X el Sabio (在位1252年～1284年)によって、『聖母マリア頌歌集 *Cantigas de Santa María*』が編まれたのも13世紀のことである。このように、多くの聖母崇敬が見られるが、柱の聖母はより人々の関心を集めたと推察できる。それは、柱の聖母が唯一無二の被昇天前の聖母であり、さらに、その出現は、当時、崇敬が高まっていた聖ヤコブの伝承の中で語られるからである。

だが、聖ヤコブ伝承に聖母マリアが登場するのはあまり珍しいことではない。例えば、『聖母マリア頌歌集』第26番は、サンティアゴ巡礼に向かう若者が悪魔に騙され自殺するが、聖ヤコブが聖母マリアに執り成しを願ったお陰で生き返ったという話である²⁵。これは、サンティアゴ巡礼路において口伝で最も広まった話の1つであり、同様の話が12世紀の『カリクスティヌス写本 *Codex Calixtinus*』第2書「奇跡録」第17話²⁶、また『黄金伝説』においても語られる²⁷。自殺者の魂は救済されないが、聖ヤコブはそのような魂を救うことが可能な「有力な守護聖者」であった²⁸。

また、伝承の過程で変化し、一方では聖ヤコブによって、一方では聖母マリアによって奇跡がもたらされる話も存在する。「奇跡録」第5話には、サンティアゴ巡礼の途中、宿屋の亭主に騙され無実の罪を着せられた父親と息子の話

23 Jesús Criado Mainar, Santiago Apóstol y el Pilar de Zaragoza-El papel de las imágenes en el debate pilarista a comienzos del siglo XVII, *Miscelánea de estudios en homenaje a Guillermo Fatás Cabeza*, IFC, Zaragoza, 2014, p. 207.

24 Asunción Blasco Martínez, Nuevos datos sobre la advocación de nuestra señora del Pilar y su Capilla (Zaragoza siglos XIV-XV), *Aragón en la Edad Media*, XX, 2008, p. 122.

25 Alfonso X, el Sabio, *Cantigas de Santa María*, Editorial Castalia, Madrid, 1985, pp. 56-57.

26 *Codex Calixtinus*, <http://www.camino santiagoencadiz.org/index/CodexCalixtinus/CodexCalixtinus.html> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

27 ヤコブス・デ・ウォラギネ, *op. cit.*, pp. 477-478.

28 ノルベルト・オーラー, *op. cit.*, pp. 212-213.

がある。息子は絞首刑にされるが、聖ヤコブが天国の食べ物を与え、守り続けたおかげで生きていたという話である。この絞首刑の息子は『黄金伝説』においても同様の内容で収められているが²⁹、『聖母マリア頌歌集』第175番では、聖ヤコブの代わりに聖母マリアが絞首刑の息子を救済する³⁰。同世紀に、同じ伝承でありながら、一方は聖ヤコブ、一方は聖母マリアを登場させることが可能だったのは、両聖人を神からの恵みを執り成す同等の役割を担う崇敬対象者として捉えていたからであろう。

このような両聖人を結ぶ柱の聖母の伝承が生まれたサラゴサは、イベリア半島と地中海またフランス以北を結ぶ要所であり、イスラム教とキリスト教の両方の異なる文化に触れた場所である。柱の聖母伝承が誕生するまでの歴史を振り返ると、サラゴサは、1118年、アルフォンソ1世戦闘王 Alfonso I el Batallador（在位1104～34年）によって、イスラム教徒から奪回された後に、アラゴンの首都となった場所である。アルフォンソ1世は、奪還後すぐに、メスキータを改築した聖サルバドル大聖堂 La Seo de San Salvador を置き、アラゴンのキリスト教の中心地とした³¹。その後、1119年、教皇ゲラシウス2世 Gelasio II（在位1118～19年）によってサラゴサの司教に任じられたフランス・ベアルン出身のリブラナ Pedro de Librana は、新しい司教区での組織作りを行った³²。リブラナは、9世紀の文献に聖母教会（のちの柱の聖母教会）の記録が残ることに気づき、その存在を重要視した³³。そして、聖母教会の聖母マリアに詣でた³⁴。

リブラナが聖母教会に注目したことを契機に、聖母教会は、1138年、教皇インノケンティウス3世 Inocencio III（在位1198～1216年）によって、聖アウグスティヌスの修道会会則に基づく参事会教会へと変わる³⁵。さらに、1187年、アラゴン王アルフォンソ2世 Alfonso II de Aragón（在位1162～96年）は、サラゴサのオイトウラ地域における全収入を、聖母教会の聖母マリアが常に灯りに

29 ヤコブス・デ・ウォラギネ, *op. cit.*, p. 476.

30 Alfonso X, el Sabio, *op. cit.*, pp. 285-287.

31 Ana del Campo Gutiérrez, *Aproximación a una mapa devocional de Zaragoza en el Siglo XIV, Turiaso*, 16, CSIC, Zaragoza, 2002, p. 92.

32 Antonio Ubieto Arteta, Nota sobre el obispo Esteban (1099-1130), *Argensola: Revista de Ciencias Sociales del Instituto de Estudios Altoaragoneses*, 29, Instituto de estudios altoaragoneses, Huesca, 1957, p. 60.

33 Ana del Campo Gutiérrez, *op. cit.*, pp. 89-91. グティエレスは、聖母教会の設立起源は不明で、伝承や奇跡と関連づけられた教会であると述べる。

34 Asunción Blasco Martínez, *op. cit.*, p. 120. リブラナは、聖母教会に詣でたと記録に残る初めての人物でもある。リブラナが聖母教会を訪れた頃は、柱の聖母ではなく、聖母マリアに対して行われた崇敬であった。

35 Ana del Campo Gutiérrez, *op. cit.*, p. 92.

照らされるように蝋燭として捧げ、聖職者にアラゴン王たちの加護を祈るように命じた³⁶。こうして、聖母教会は、12世紀までには、聖サルバドル大聖堂と並ぶ重要な教会としての地位を獲得した³⁷。聖母教会の聖母マリアへの崇敬は、サラゴサ以外の地域にも広まるようになり、やがてアラゴン全土で祈りが捧げられるようになった³⁸。13世紀には、聖母教会はアラゴンの中心的教会となり³⁹、多くの文献に登場するようになった⁴⁰。

やがて、聖母教会は巡礼地として発展していく。1296年、教皇ボニファティウス8世 Bonifacio VIII（在位 1294～1303年）は、聖母教会に1年40日間の免罪符を許可して、教会への巡礼者を集めた⁴¹。その後、1299年5月27日、聖母教会は、窃盗等から巡礼者を保護する通行許可証の発行許可をローマから与えられた。⁴²これにより、聖母教会は、サラゴサを経由する全てのキリスト教徒を支える場所になった。この許可証には、柱の聖母と明記された⁴³。こうして聖母教会は、柱の聖母教会へと名称を変え、1299年から柱の聖母への巡礼が行われるようになった⁴⁴。

ラモン Ramón は、サラゴサで柱の聖母の伝承が生まれた理由として、当時、興隆していたサンティアゴ巡礼へ向かう巡礼者をサラゴサまで呼び込むためのプロパガンダではなかったかと推察している⁴⁵。12世紀には、既にアラゴンの王によってサンティアゴ巡礼路が整備されている点から⁴⁶、サンティアゴ巡礼を強く意識していたことが分かる。そうした動きが反映されてか、「奇跡録」にも、サラゴサは聖ヤコブの奇跡がもたらされた場所として取り上げられている⁴⁷。レコンキスタの合戦中、アルモラビド族に捕らわれていた20人のキリスト教徒の男性が、聖ヤコブによって牢獄から解放された話である。注目すべき点は、この話が「奇跡録」の第1話目に収められていることである。これによ

36 *Loc. cit.*

37 *Loc. cit.*

38 *Loc. cit.*

39 *Ibid.*, p. 90.

40 Asunción Blasco Martínez, *op. cit.*, p. 122.

41 *Ibid.*, p. 121.

42 *Ibid.*, p. 122.

43 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 133.

44 Asunción Blasco Martínez, *op. cit.*, p. 122.

45 Francisco Javier Ramón Solans, *La Virgen del Pilar dice... usos políticos ya nacionales de un culto mariano en la España contemporánea*, Universidad de Zaragoza, Zaragoza, 2014, p. 53.

46 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, p. 92. カタルーニャでも巡礼路が整備された。ポロキは、アラゴンとカタルーニャの王たちの結束を高めるため、両地域に巡礼路が作られたと示唆する。

47 *Codex Calixtinus*, <http://www.caminosantiagoencadiz.org/index/CodexCalixtinus/LibroIIICapI.html> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

り、サラゴサは聖ヤコブと関わりのある土地であることを深く印象付けることができる⁴⁸。ボロキは、1118年のレコンキスタ以前には既にサラゴサの聖母教会では、聖ヤコブと聖母マリアへの崇敬が行われていたと推察する⁴⁹。つまり、柱の聖母の伝承誕生は13世紀末の『ヨブ記註解』が出典とされるが、すでに1世紀以上も早い12世紀には聖ヤコブと聖母マリアが、サラゴサの聖母教会において崇敬されていた可能性がある。古くから聖母教会で崇敬されていた聖ヤコブと聖母マリアを、柱の聖母伝承を用いて必然的に結び付けることによって、サラゴサが聖地であることを広め、コンポステーラへ向かう巡礼者をサラゴサに呼び込んだのであった⁵⁰。

4. 伝承成立後の巡礼

11・12世紀には、『カリクスティヌス写本』にも取り上げられるように、ピレネーから北部内陸のフランスの道を通り、東から西への向かうサンティアゴ巡礼が一般的であった⁵¹。だが、1299年以降は、サラゴサを経由地にする巡礼者も増えてきた。先に述べたように、巡礼者がサラゴサに向かうのは、道中を安全に過ごすために通行許可証を手に入れる必要があったからである。だが、それだけではなく、サラゴサを経由するのがコンポステーラへ向かう正式ルートとして奨励されていたからでもある⁵²。こうして、サラゴサは、コンポステーラのみならず、エルサレム巡礼、ローマ巡礼などへの往路または帰路で巡礼者が訪れる場所にもなった⁵³。

アラゴン領内では、フランスの道以外に、複数の巡礼の道が存在するが、個々の巡礼者がどの道を選択して目的地に向かったのかは明らかにされていないとアグスティン・ウビエトは述べる⁵⁴。ボロキは、サンティアゴ巡礼者が、特に利

48 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, p. 90. ボロキは、「奇跡録」を編纂した教皇カリクスティヌス2世が、サラゴサで柱の聖母が聖ヤコブの前に出現した話を知っていたのではないかと示唆する。

49 *Ibid.*, p. 99.

50 Asunción Blasco Martínez, *op. cit.*, p. 120.

51 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 20.

52 *Ibid.*, p. 326.

53 *Loc. cit.*

54 *Ibid.*, pp. 28-29. アグスティン・ウビエトは、ロテンセの道 Camino Rotense, サラスの道 Camino de Salas, モネグロの道 Camino de Monegro, 聖ヤコブの道 Camino de San Jaime, エブロの道(またはトルトサの道) Camino del Ebro (o Tortosa), カラトラボの道 Camino Calatravo, ビナロスの道 Camino de Vinaroz, マエストラスゴの道 Camino del Maestrazgo, ハイメ1世の道(またはバレンシアの道) Camino de Jaime I (o de Valencia), モリナの道 Camino de Molina, コンプルテンセの道 Camino Complutense, サン・ミジャンの道 Camino de San Millán, ソリアの道 Camino Soriano, ナバラの道 Camino Navarro を挙げる。

用していた道を2つ挙げる⁵⁵。まず、第1の道は、エブロの聖ヤコブ道 *Camino Jacobeo del Ebro* である。この道はさらに2つに分けられ、1つがエブロ川を使う水上交通路、もう1つはトルトサからサラゴサへ向かう陸上交通路であった⁵⁶。経路地は、ガンデサ、ファバラ、カस्प、サスタゴ、ヘルサ、キント、フエンテス・デ・エブロである。トルトサはイベリア半島と地中海を結ぶ要所であり、主にイタリア、バレアレス諸島、タラゴナの人々はこの水陸交通路を利用した⁵⁷。第2の道は、カタルーニャの道 *Camino Catalán* である。フランスのモンペリエ、ペルピニャンから、カタルーニャのジローナ、マタロ、バルセロナ、モンセラット、レリダ⁵⁸を通り、アラゴンのフラガ、ブハラロス、ピナ・デ・エブロを経由する。

サラゴサの柱の聖母教会は、聖ヤコブと聖母マリアへの崇敬が行える場所であった。1つの場所で複数の聖人を崇敬することは、同時に複数の聖人の加護を受けることができると考えられていた⁵⁹。すなわち、コンポステーラに向かう巡礼者がサラゴサの柱の聖母教会に詣でることは、聖ヤコブの保護に身を委ねることに繋がった。このような理由によって、柱の聖母教会への巡礼は興隆するが⁶⁰、急速に巡礼者数が増えるのは15世紀からである。1433年にナバラ女王ブランカ1世 *Blanca de Navarra* (在位1425～41年)が病氣治癒に柱の聖母教会を訪れたことが契機である。それ以降、巡礼者数が益々増加していく⁶¹。巡礼を行う理由として、バスケス・デ・パルガは、第1が罪の赦し、第2が直面する問題に対する切実な願い、第3が病氣治癒であると述べる⁶²。特に第3の病氣治癒は、聖母マリア崇敬の大きな動機であり、人々は治療困難な病氣から救われるために、「知恵の母」である聖母マリアのもとで祈りを捧げた⁶³。

だが、巡礼者を柱の聖母教会に呼び寄せたのは、それだけではないだろう。柱の聖母教会の立地も影響を与えていたと推察できる。教会は、エブロ川沿いに位置する。阿部は、河川が病や不幸を流す治癒力を持つと考えられていたと

55 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, pp. 87-88.

56 *Ibid.*, p. 88. 中世にはエブロ川を利用した内陸水運は盛んであったが、16・17世紀は川に農業用の水車や石垣が設置されていたため船の航行が難しかったとボロキは述べる。

57 *Ibid.*, pp. 87-88.

58 *Ibid.*, p. 89. ボロキは、レリダには14世紀に7つの救護院があり、その内 *San Marcial* と *D'en Serra* はサンティアゴ巡礼者専用であったと指摘する。

59 ノルベルト・オーラー, *op. cit.*, p. 256.

60 Asunción Blasco Martínez, *op. cit.*, p. 122.

61 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 324.

62 Vázquez de Parga y otros, *Las peregrinaciones a Santiago de Compostela*, Tomo I, Gobierno de Navarra, Pamplona, 1993, pp. 120-123.

63 ノルベルト・オーラー, *op. cit.*, p. 72.

述べる⁶⁴。特に、エブロ川は、『カリクスティヌス写本』第5書「巡礼案内書」第5章において、「体に良い水が流れ、魚が豊富にいる」⁶⁵と讃えられる美しい川である。人々が、エブロ川沿いに聳え立つ柱の聖母教会を訪れるのは、聖母に祈りを捧げるだけでなく、エブロの聖なる川によって、病を浄化してもらうことを願っていたと考えられる。

しかし、病人のみが巡礼者ではない。様々な職業の人々が巡礼を行っていた。サラゴサには、学生、外科医、小間物商、商人、居酒屋の主人、従者、酌をする召使、執行官、理髪師、書店主、画家など様々な職業の者が訪れていた⁶⁶。こうした巡礼者を支えたのが救護院である。アラゴン領内には乞食⁶⁷、巡礼者、サンティアゴ巡礼者専用の救護院が整備されていた⁶⁸。

アグスティン・ウビエトの11世紀から18世紀の巡礼者の分析結果によると、サラゴサを訪れた巡礼者には、フランシスコ会、アウグスティヌス会、ドミニコ会などの修道士、さらに司祭、参事会員、枢機卿等の聖職者もいた⁶⁹。枢機卿にはシスネロス Francisco Jiménez de Cisneros、メンドサ Pedro González de Mendoza の名も見られる⁷⁰。また、聖人ではアッシジのフランシスコ Francisco de Asís、フランシスコ・デ・ボルハ Francisco de Borja、イグナシオ・デ・ロヨラ Ignacio de Loyola、王ではアラゴン王アルフォンソ2世、ナバラ女王ブランカ1世をはじめ、イングランド王エドワード1世 Eduardo I de Inglaterra、フランス王ルイ7世 Luis VII de Francia、カトリック両王 los Reyes Católicos、カルロス1世 Carlos I、フェリペ2世 Felipe II、フェリペ3世 Felipe III、フェリペ4世 Felipe IV、バルタサル・カルロス王子 Baltasar Carlos de Austria、フェリペ5世 Felipe V、カルロス3世 Carlos III、さらにポルトガル王らといった人々が巡礼を行った⁷¹。さらに巡礼者の中にはコンキスタドールのエルナン・コルテス Hernán Cortés、探検家のエンリケ・クック Enrique Cook もいる⁷²。

こうした高位聖職者や王が加護を求めに訪れることにより、聖ヤコブとの密

64 阿部謹也『中世を旅する人々—ヨーロッパ庶民生活点描—』平凡社 1978年 p. 24.

65 *Codex Calixtinus*, <http://www.caminosantiagoencadiz.org/index/CodexCalixtinus/LibroVCapVI.html#8> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

66 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 15.

67 阿部謹也, *op. cit.*, pp. 181-182. 阿部は、乞食に手を差し伸べるのは、中世以降、自らの靈魂の救いにとって重要な善行であるとされていたと述べる。

68 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, p. 100.

69 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 15.

70 *Loc. cit.*

71 *Loc. cit.*

72 *Loc. cit.*

接な繋がりを持つ柱の聖母への崇敬は益々高まっていった⁷³。だが、1640年のカラダの奇跡 *el milagro de Calanda* を境にその目的に相違が見られる。カラダの奇跡とは、アラゴンのカラダ出身の青年ペリセル Miguel Pellicer が事故で片足を失い、数年にわたり柱の聖母に祈り続けたところ、新たな足が出てきたという話である。この奇跡の話は瞬く間に広がり、フェリペ4世が宮廷でペリセルの奇跡の足にキスをしたとされる。この奇跡を契機に、1640年以降、伝承上の柱の聖母への崇敬だけでなく、カラダの奇跡を起こした柱の聖母への祈りも捧げられるようになった。すなわち、カラダの奇跡以前は、柱の聖母とは、聖ヤコブの布教活動の伝承に組み込まれていた聖母マリアの1つの呼び名としてしか認識されていなかった。そのため、サラゴサにおいても、柱の聖母を伝承から独立した崇敬の対象として捉えていなかった⁷⁴。しかし、カラダの奇跡以降、柱の聖母は、1653年にサラゴサの町の庇護者⁷⁵、1678年にアラゴンの庇護者になった⁷⁶。やがて、柱の聖母に対する巡礼も行われるようになった⁷⁷。

聖ヤコブ伝承から独立した柱の聖母崇敬は、聖ヤコブ崇敬離れの根拠として見られることもある。だが、柱の聖母だけの崇敬を目的に巡礼を行ったのは、アラゴンを訪れた巡礼者の一部である。アグスティン・ウビエトは、15世紀から18世紀の往路・復路のいずれかでアラゴンを通った巡礼者の目的地は、コンポステーラが56.1%、ローマが14.5%、サラゴサが13.1%であったと述べる⁷⁸。つまり、柱の聖母はカラダの奇跡以降、アラゴン全体の庇護者として、その崇敬は大きく発展し、サラゴサを巡礼の目的地として選択する巡礼者は増えた。だが、サラゴサを最終目的地としたのではなく、コンポステーラへの通過点として選んだ巡礼者数が約6割にも上るのである。よって、多くの巡礼者にとって、柱の聖母は、聖ヤコブ伝承の一部を成す聖母崇敬として位置づけられていたと考えられる。では、次に、その時代にどのような巡礼者が訪れていたのかを見ていこう。

5. 近世の巡礼

アグスティン・ウビエトは、17・18世紀にアラゴンを訪れた巡礼者数は最高

73 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, p. 100.

74 詳しくは、Nazario Pérez, *Apuntes históricos de la Devoción a Nuestra Señora la Santísima Virgen del Pilar de Zaragoza*, La Editorial, Zaragoza, 1930, p. 108 を参照のこと。

75 Francisco Javier Ramón Solans, *op. cit.*, p. 57.

76 *Ibid.*, p. 59.

77 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 134.

78 *Ibid.*, p. 14.

値を記録したと述べる⁷⁹。一方で、バスケス・デ・パルガらは、16世紀の宗教改革以降、巡礼者は減少し続けたと述べる⁸⁰。だが、アグスティン・ウビエトは、それはバスケス・デ・パルガらが中世と同様にフランスの道または沿岸のカンタブリア海沿いの道 *Camino de la Costa Cantábrica* を中心に近世の研究を行ったからだと言及する⁸¹。アグスティン・ウビエトは、近世の巡礼者が中世とは異なる巡礼の動きをしたことを示唆する。フランスの道は、ピレネー山脈でイバニェタ峠の道とソンプルト峠の道の2つに分かれた後にプエンテ・ラ・レイナで再び合流する。12世紀にこの道は、巡礼者で溢れかえっていた。だが、17世紀、ソンプルト峠の道のハカは巡礼者の流れが途絶え⁸²、同様に、イバニェタ峠の道の町ロンセスバジェスにも巡礼者は訪れなかった⁸³。時代によって、戦争、飢餓、疫病、自然災害などの影響を受けて巡礼には流行り廃れがあるが⁸⁴、巡礼路も同様の影響を受けたのだろう。こうした様々な理由から、巡礼者の多くが、中世とは異なるルートを選択するようになったと考えられる。彼らはアラゴンに入り通行許可証の申請のためにサラゴサを訪れた。

巡礼者の内訳を見ると、外国からの巡礼者は44%、スペイン国内の巡礼者は39.9%、不明は17.1%である⁸⁵。外国の巡礼者は、イタリアからが44.4%と最も多く、次にフランス32.7%、ドイツ8.4%と続く⁸⁶。『ドン・キホーテ *Don Quijote de la Mancha*』後編第54章では、バラタリア島 *Ínsula Barataria* を治めるサンチョパンサが島から少し行ったところで、《施し物》を求めるドイツからのえせ巡礼者に会おう場面がある⁸⁷。バラタリア島は、サラゴサから34キロ離れたエブロ川沿いの村アルカラ・デ・エブロ *Alcalá de Ebro* がモデルとされている⁸⁸。セルバンテスは『ドン・キホーテ』において、アラゴン領内で外国からの巡礼者をよく見かけるといふ様子を反映させたのであろう。

アラゴンを訪れた外国の巡礼者は他に、ポルトガル、ギリシア、イギリス、ハンガリー、プロシアなど様々な国から来ており、その中には日本からの巡礼

79 *Ibid.*, p. 170.

80 Vázquez de Parga y otros, *op. cit.*, pp. 111-118.

81 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 322.

82 *Ibid.*, p. 319.

83 *Ibid.*, p. 324.

84 *Ibid.*, p. 325.

85 *Ibid.*, p. 19.

86 *Ibid.*, p. 18-19.

87 セルバンテス『ドン・キホーテ』後編3 牛島信明訳 岩波書店 2001年 pp. 80-97.

88 Vicente Joaquín Bastús y Carrera, *Nuevas anotaciones al ingenioso hidalgo D. Quijote de la Mancha, de Miguel de Cervantes Saavedra*, Barcelona, 1834, p. 27. 村はエブロ川に取り囲まれるような形であり、まさに島のように見えるとバストゥスは述べる。

者も含まれる⁸⁹。サラゴサには日本の遣欧使節が2度訪問している。1度目が伊藤マンショの天正遣欧少年使節（1585年）、2度目が支倉常長の慶長遣欧使節（1615年）である。天正遣欧少年使節はローマからの帰路、慶長遣欧使節はローマへの往路で立ち寄っている。慶長遣欧使節はバルセロナから海路でフランスのサン・トロペに向っている。彼らは、サラゴサからバルセロナまでは、フラガ、レリダ、セルベラ、イグアラダを経由していることから⁹⁰、カタルーニャの道を通ったことが分かる。ボロキは16世紀から20世紀まで、カタルーニャの道が最も巡礼路として使用された道であったと述べる⁹¹。使節団はカタルーニャの道つまり聖なる巡礼路を通り、ローマに向かったことが分かる。

カタルーニャの道をはじめアラゴン領内の様々な巡礼路を通りコンポステーラを訪れた外国の巡礼者は、イタリアが最多であったとアグスティン・ウビエトは述べる⁹²。すなわち、17・18世紀に、イタリアの巡礼者は好んでアラゴンを經由してサンティアゴ巡礼を行っていた。だが、長距離巡礼が減少したと見られるその時期に、なぜ、イタリアからそのような巡礼を人々は行ったのだろうか。

6. イタリアからの巡礼

イタリア全体の記録ではないが、バスケス・サントス Vázquez Santos のローマ市の聖ヤコブ図像に関する研究は、それを解く手がかりになるだろう⁹³。バスケス・サントスによると、元々、ローマは、12世紀のコンポステーラ大司教ダイエゴ・ヘルミレス Diego Gelmírez、教皇ウルバヌス2世 Urbano II と教皇カリストゥス2世 Calixto II の功績によって、コンポステーラへの巡礼が盛んに行われるようになった地域であった⁹⁴。その頃、ローマに入ってきた聖ヤコブの図像は巡礼者聖ヤコブであった⁹⁵。だが15世紀末からのオスマントルコの拡大はロ

89 Agustín Ubieta Arteta, *op. cit.*, p. 18-19.

90 五野井隆史『支倉常長』吉川弘文館 2003年 p. 264.

91 Belén Boloqui Larraya, *op. cit.*, p. 100.

92 *Ibid.*, p. 21. アグスティン・ウビエトによると、18・19世紀はオビエド巡礼が興隆した。*Ibid.*, pp. 28-29. オビエドの大聖堂にはイエスと聖母マリアの聖遺物が収められた聖遺物箱 (Arca Santa) が存在し、18・19世紀に人々の信仰を集めた。アグスティン・ウビエトは、オビエドがコンポステーラのライバル的巡礼地となったと述べる。

93 Rosa Vázquez Santos, Santiago el Mayor en el barroco romano: Rusconi, Maratti, Romanelli, *Cuadernos de arte e iconografía*, 15(30), Fundación Universitaria Española, Madrid, 2006, pp. 285-298. Rosa Vázquez Santos, Primeras conclusiones sobre el culto y la iconografía de Santiago el Mayor en la ciudad de Roma, *Archivo español de arte*, 83(329), CSIC, Madrid, 2010, pp. 1-22.

94 Rosa Vázquez Santos, *op. cit.*, 2010, p. 11.

95 *Loc. cit.*

ローマに影響を及ぼすことになり、スペインの守護聖者としてのモーロ人殺し聖ヤコブは、ローマでも軍事的政治的に利用されるようになった⁹⁶。やがて、図像に影響を与え、トルコ人殺し聖ヤコブ **Santiago Mataturco** へと変容していったとされる⁹⁷。しかし、16世紀のトリエント公会議による決定によって、巡礼者聖ヤコブやモーロ人殺し聖ヤコブのような福音書から逸脱した図像は、対抗宗教改革において禁止の対象の1つとなった⁹⁸。17世紀初頭、ローマでは古典主義的な芸術活動が盛んになり、ローマの芸術家たちは、再び、初期キリスト教の聖人たちをモチーフにした。教会には、聖フェリペ、小ヤコブ、聖ペドロ、聖パブロ、聖マテオといった聖人たちの古典的な図像がローマの町に溢れた⁹⁹。また、聖ヤコブも好んで使用された聖人の1人であった。ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ **San Giovanni in Laterano** 大聖堂には、17世紀にカミッロ・ルスコーニ **Camillo Rusconi** によって作られた使徒聖ヤコブの彫刻がある。芸術家たちは、各聖人を表現する際に、創作心をかきたてるために、『黄金伝説』を使用した¹⁰⁰。本稿で度々取り上げたが、『黄金伝説』は中世までのキリスト教における聖人・殉教者の列伝であり、各聖人に纏わる伝説の集大成である。各聖人の生涯を、伝説を主軸に描いているため、トリエント公会議の趣旨とは異なるのではないかと感じる。

しかし、マールは、実は、カトリック教会は常に穏健であったと述べる¹⁰¹。つまり、対抗宗教改革としてカトリック教会が行ったのは、より聖人の威厳を高めるための改革であった¹⁰²。そのため、『黄金伝説』に対しても寛容で、厳しく対処する必要はないと考えていた¹⁰³。トリエント公会議の影響によって、ローマにおいて伝承上の巡礼者聖ヤコブやモーロ人殺し聖ヤコブの図像は減少していくが、古典的な使徒聖ヤコブ、そしてまた、17世紀にスペインで急速に崇敬を集めた柱の聖母の出現とそれを目撃した聖ヤコブの図像は広まっていった¹⁰⁴。ローマでこの図像が普及したことにより、柱の聖母と聖ヤコブへの崇敬のために、人々はイタリアからアラゴンに入り、サラゴサを經由してコンポステーラまで長距離巡礼を行ったと考えられる。

96 *Loc. cit.*

97 *Ibid.*, p. 17.

98 *Ibid.*, p. 20.

99 Rosa Vázquez Santos, *op. cit.*, 2006, p. 286.

100 *Loc. cit.*

101 エミール・マール『ヨーロッパのキリスト教美術—12世紀から18世紀まで—』柳宗玄・荒木成子訳 岩波書店 1980年 pp. 344-345.

102 Rosa Vázquez Santos, *op. cit.*, 2010, p. 20.

103 エミール・マール, *op. cit.*, pp. 344-345.

104 Rosa Vázquez Santos, *op. cit.*, 2010, p. 21.

このように、柱の聖母と聖ヤコブ図像は両聖人を讃える典型的な図像としてスペイン国外でも根付いたことから、17世紀中盤、コンポステーラ大聖堂も柱の聖母の図像を取り込むようになる¹⁰⁵。それまでは聖母マリアへの礼拝堂であった場所を、柱の聖母に捧げたのであった。そして、聖ヤコブ、聖霊、柱の聖母の礼拝堂が直線で並ぶようになった¹⁰⁶。こうして、中世にサラゴサで生まれた柱の聖母の伝承が、時を経て、聖ヤコブ伝承の1つとして17世紀のコンポステーラで受け入れられたのである。

17世紀のムリーリョは、聖ヤコブの前に柱の聖母が出現した理由を『柱の聖母と天使の礼拝堂の設立』で次のように述べる。

神が（旧約聖書の）ヤコブに天と地を結ぶ梯子をかけてあげたように、聖ヤコブにも神が守っていることを伝えるためであった。（中略）聖ヤコブはヤコブのように眠らず、起きて、心の底から祈った。¹⁰⁷

柱の聖母が出現したのは、神を愛し、神に愛される聖ヤコブが布教活動を行ったからである。そして、聖ヤコブがヤコブのように寝なかったのは、神への愛の深さである。つまり、聖ヤコブがスペインで布教活動を行わなければ、柱の聖母は出現しなかった。ムリーリョは、柱の聖母を崇敬する柱の聖母派の人であるが、聖ヤコブを讃える加筆を行った。柱の聖母の伝承完成に貢献したアグレダとアマダも同じく柱の聖母派であったが、各々の書で聖ヤコブへの崇敬愛を表した。このように、人々は、柱の聖母のみでなく、聖ヤコブに対する崇敬愛を近世においても変わらず持ち続けていた。そして、聖ヤコブを通して柱の聖母の介入を望み、慈愛を求めた。2つの崇敬は互いに影響し合うことで、より強固な絆で繋がっていった。よって、柱の聖母とは、柱の聖母と聖ヤコブが相補的關係のもとで成り立つ崇敬の表象といえる。両崇敬に相補的關係があることによって、近世の聖ヤコブ崇敬は危機的状況にあったにも関わらず、聖ヤコブの伝統の保持が可能であったと考えられる。17世紀のカステジャは、『聖ヤコブの歴史』の冒頭で以下のように述べる。

105 Agustín Ubieta Arteta, *op. cit.*, p. 270.

106 Ana del Campo Gutiérrez, *op. cit.*, pp. 96-97. 17世紀のサラゴサの柱の聖母教会の図面によると、聖ヤコブの礼拝堂が存在する。教会内には他に聖ブラウリオ、聖ビセンテ、聖ロレンソの礼拝堂もあるが、特に柱の聖母、聖霊、聖ヤコブが象徴的なものとして礼拝堂の中心になっているとグティエレスは述べる。

107 Diego Murillo, *Fundación milagrosa de la capilla angelica y apostolica de la madre de Dios del Pilar y excelencias de la ciudad de Çaragoça*, Barcelona, 1616, pp. 65-67. 筆者訳

私には、今、著書を出版しなければならない義務がある。なぜなら、いくつかの出版物には、スペインでの聖ヤコブの布教活動に関して否定的な立場が取られるからである。聖ヤコブがスペインに布教活動に来たのは、これまで教会が守り抜いた重要な歴史である。私は、聖ヤコブの偉業があったからこそ存在する聖ヤコブ誓約やクラビーホの戦いを侮辱する者に対してこの本を出版する。

108

聖ヤコブの伝統保持に尽力したカステジャは、聖ヤコブによって布教活動が行われたという証を、サラゴサの柱の聖母に見出した。柱の聖母教会がサラゴサに存在することこそが、聖ヤコブがスペインで布教活動を行ったという紛れもない証拠であると主張したのであった¹⁰⁹。

近世における思想の変化のもと、聖ヤコブの伝統の保護を望む人々は、変化に立ち向かうことのできる根拠が必要であった。柱の聖母は、教会として目にすることのできる聖ヤコブの布教活動の伝統を伝える1つの証になった。このように、近世の柱の聖母崇敬は、聖ヤコブ崇敬の勢いに陰りが生じていく中で、徐々に台頭し人々の崇敬を集めたのではなく、聖ヤコブの伝統保護を望む人々によって興隆した崇敬でもあった。こうして、柱の聖母の伝承は、近世において、聖ヤコブの布教活動の伝統を守り抜く伝承として重要な役割を担うようになったのである。

7. おわりに

近世は、聖ヤコブ崇敬やサンティアゴ巡礼から人々が離れたとされる時代である。16世紀末から17世紀にかけて巻き起こった聖ヤコブに関する論争、対抗宗教改革などのルネッサンス期の新たな思想の影響を受けたことによるコンポステーラへの巡礼者の減少、そして、時を同じくして台頭してきたサラゴサの柱の聖母崇敬は、近世の聖ヤコブ崇敬離れの根拠にされることも多い。だが、本稿では、その説を再考し、柱の聖母とは、聖ヤコブの伝統を保護する存在ではなかったのではないかと仮説を立て、通説の再考を行った。方法としては、柱の聖母と聖ヤコブとの繋がりを、主にアラゴンを訪れる巡礼者を通して見てきた。

本稿では、まず、柱の聖母伝承を、サラゴサにサンティアゴ巡礼を呼び込むために、プロパガンダ的役割を担ったものとして捉えた。それにより、13世紀

¹⁰⁸ Mauro Castella Ferrer, *Historia del Apóstol de Jesús Christo Santiago Zebedeo, patrón y capitán general de las Españas*, Madrid, 1610, p. 26. 筆者訳

¹⁰⁹ *Ibid.*, p. 146.

頃からサンティアゴ巡礼者がサラゴサを経由するようになり、多くの著名人も訪れる巡礼地として変化していく経緯を明らかにした。17世紀のカランダの奇跡を機に、伝承上の柱の聖母ではなく、カランダの奇跡を起こした柱の聖母への巡礼も見られるようになった。だが、それは一部であり、サラゴサを訪れる巡礼者の多くは、伝承上の柱の聖母と聖ヤコブの関係を重視し、サラゴサへの巡礼と合わせてコンポステーラへの巡礼も行っていた。

サラゴサを経由する巡礼は17・18世紀が最盛期であり、諸外国からも巡礼者が訪れた。その中でも、特にイタリアからの巡礼者が多かった。その理由として、イタリアでは対抗宗教改革の影響によって、巡礼者聖ヤコブやモーロ人殺し聖ヤコブに代わって、古典的な使徒としての聖ヤコブと柱の聖母が図像モチーフとして定着したからである。スペイン国外においても広まった聖ヤコブと柱の聖母の図像を、コンポステーラ大聖堂も重要視するようになり、聖母マリアに代わって柱の聖母の図像がコンポステーラ大聖堂に取り入れられた。中世の聖ヤコブ崇敬の高まりのもと、各地で数多く生まれた聖ヤコブ伝承の1つであった柱の聖母伝承は、こうして、17世紀に、聖ヤコブの地コンポステーラにおいて受け入れられたのであった。

柱の聖母の伝承は、近世に入り、主に17世紀の複数の作家によって書き綴られながら、完成していった。それらの作品において、聖ヤコブと柱の聖母との関係性が改めて明記され、柱の聖母は、聖ヤコブがスペインで布教活動をしたからこそ出現したのだと強調された。こうして、柱の聖母は、当時、論争の的となっていた聖ヤコブの伝統を守る根拠として捉えられるようになった。

では、こうして守られた聖ヤコブと柱の聖母に、近世の人々はいったい何を望み巡礼を行っていたのであろうか。その理由の1つに、ペストが関連していると推測される。17・18世紀のヨーロッパではペストが猛威を振るっていた。民衆は、得体のしれない病に怯え、聖なる者の介入を望み、病からの解放を目指し、コンポステーラへと向かった。なぜなら、聖母マリアはペストからの解放者であり、聖ヤコブもまたペストからの解放者¹¹⁰であったからである¹¹¹。17世紀中頃のペストの流行後、サラゴサを経由してコンポステーラへ行く巡礼者が増加している¹¹²。ペストとの関係は、今後のテーマにしたいと考える。

近年、アラゴンをはじめ、各地で巡礼研究が進んできている。これまであまり触れてこられなかった近世の聖人崇敬や巡礼の実像が、今後、明らかになっていくだろう。

110 ウォラギネ・デ・ヤコブス, *op. cit.*, p. 479.

111 ペスト解放者として、最も知られる聖人は聖ロックである。

112 Agustín Ubieto Arteta, *op. cit.*, p. 125.

参考文献

- Ágreda, María de Jesús de (1696). *Mística ciudad de Dios*, Volúmen 3. Barcelona.
https://books.google.co.jp/books?id=7uSiDBPdapEC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- (1860). *Mística ciudad de Dios*, Volúmen 7. Barcelona.
https://books.google.co.jp/books?id=KI0wAQAAMAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Alegría Ruiz, Francisco José (2012). La promoción episcopal de una nueva iconografía en el siglo XVIII: Santiago Apóstol origen de la fe en la diócesis de Cartagena, *Murgetana*, 127, pp. 95-116. Murcia: Real Academia Alfonso X el Sabio.
- Alfonso X el Sabio (1985). *Cantigas de Santa María*, Madrid: Editorial Castalia.
- Amada, Josep Félix (1796). *Compendio de los milagros de Nuestra Señora del Pilar de Zaragoza*. Zaragoza. https://books.google.co.jp/books?id=9gD53pbAegcC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Bastús y Carrera, Vicente Joaquín (1834). *Nuevas anotaciones al ingenioso hidalgo D. Quijote de la Mancha, de Miguel de Cervantes Saavedra*, Barcelona. https://books.google.co.jp/books?id=3CIAAAAAMAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Blasco Martínez, Asunción (2008). Nuevos datos sobre la advocación de nuestra señora del Pilar y su Capilla (Zaragoza siglos XIV-XV), *Aragón en la Edad Media*, XX, pp. 117-138. Zaragoza: Universidad de Zaragoza.
- Boloqui Larraya, María Belén (2005). Los caminos de Santiago en Aragón: las rutas por el valle del Ebro. El Camino jacobeo del Ebro, *Los caminos de Santiago: Arte, Historia y Literatura*, pp. 87-128. Zaragoza: CSIC.
- Campo Gutiérrez, Ana de (2002). Aproximación a una mapa devocional de Zaragoza en el siglo XIV, *Turiaso*, 16, pp. 87-144. Zaragoza: CSIC.
- Castella Ferrer, Mauro (1610). *Historia del Apóstol de Jesús Christo Santiago Zebedeo, patrón y capitán general de las Españas*, Madrid. https://books.google.co.jp/books?id=0TQdlVnpSeoC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (fecha de

- acceso: 30 de marzo de 2017).
- Castro, Americo (1966). *La realidad histórica de España*. México: Editorial Porrúa.
- Codex Calixtinus. <http://www.caminosantiagoencadiz.org/index/CodexCalixtinus/CodexCalixtinus.html> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Colomina Torner, Jaime (1988). En torno a la primera evangelización de Toledo, *Toletum*, 22, pp. 9-43. Toledo: Real Academia de Bellas Artes y Ciencias Históricas de Toledo.
- Contreras, Juan de (1940). *Santiago Apóstol-Patrón de las Españas*-. Madrid: Biblioteca Nueva.
- Criado Mainar, Jesús (2014). Santiago Apóstol y el Pilar de Zaragoza-El papel de las imágenes en el debate pilarista a comienzos del siglo XVII, *Miscelánea de estudios en homenaje a Guillermo Fatás Cabeza*, pp. 207-213. Zaragoza: IFC.
- Murillo, Diego (1616). *Fundación milagrosa de la capilla angelica y apostolica de la madre de Dios del Pilar y excelencias de la ciudad de Çaragoça*. Barcelona. https://books.google.co.jp/books?id=5xtVAAAACAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Linares, Lidwine (2006). Leyenda y figura de Santiago en dos hagiografías de principios del siglo XVII: Mauro Castellá Ferrer y Hernando Ojea Gallego y sus Historias del Apóstol Santiago, *FRAMESPA*, pp. 1-16. Toulouse: Presses universitaires Le Mirail -Mériidiennes.<https://hal.archives-ouvertes.fr/Halshs-00084008/document> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Péricard-Méa, Denis, Santiago, del apóstol al Matamoros, *SaintJacquesInfo* [En ligne], Saint Jacques un et multiple, Le saint politique, mis à jour le : 22/02/2016, <http://lodel.irevues.inist.fr/Saintjacquesinfo/index.php?id=1333> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).
- Ramón Solans, Francisco Javier (2014). *La Virgen del Pilar dice... usos políticos ya nacionales de un culto mariano en la España contemporánea*, Zaragoza: Universidad de Zaragoza.
- Ubieto Arteta, Antonio (1957). Nota sobre el obispo Esteban (1099-1130), *Argensola: Revista de Ciencias Sociales del Instituto de Estudios Altoaragoneses*, 29, pp. 59-64. Huesca: Instituto de estudios altoaragoneses.
- Ubieto Arteta, Agustín (2016). *Caminos Peregrinos de Aragón*. Zaragoza: CSIC. <http://ifc.dpz.es/publicaciones/ver/id/3478> (fecha de acceso: 30 de marzo de 2017).

2017).

Vázquez de Parga, Luis, Lacarra, J. M. y Uría Riu, J. (1993). *las peregrinaciones a Santiago de Compostela, Pamplona*, Tomo I~III. Pamplona: Gobierno de Navarra.

Vázquez Santos, Rosa (2006). Santiago el Mayor en el barroco romano: Rusconi, Maratti, Romanelli, *Cuadernos de arte e iconografía*, 15 (30), pp. 285-298. Madrid: Fundación Universitaria Española.

————— (2010). Primeras conclusiones sobre el culto y la iconografía de Santiago el Mayor en la ciudad de Roma, *Archivo español de arte*, 83 (329), pp. 1-22. Madrid: CSIC.

阿部謹也 (1978) 『中世を旅する人々—ヨーロッパ庶民生活点描—』 平凡社.

五野井隆史 (2003) 『支倉常長』 吉川弘文館.

ウォラギネ, ヤコブス・デ (2006) 『黄金伝説』 第1~4巻 前田敬作・今村孝訳 平凡社.

オーラー, ノルベルト (2004) 『巡礼の文化史』 井本 响二・藤代 幸一訳 法政大学出版局.

佐竹謙一 (2003) 『浮気な国王フェリペ4世の宮廷生活』 岩波書店.

関哲行 (2006) 『スペイン巡礼史—「地の果ての聖地」を巡る—』 講談社現代新書.

セルバンテス (2001) 『ドン・キホーテ』 後編3 牛島信明訳 岩波書店.

田辺加恵 (2016) 「「マタモロス聖ヤコブ」像の形成とその戦略的利用」 『スペイン史研究』 第30号 スペイン史学会 pp. 18-30.

マール, エミール (1995) 『ヨーロッパのキリスト教芸術—12世紀から18世紀まで—』 上・下 柳宗玄・荒木茂子訳 岩波書店.

————— (2000) 『中世末期の図像学』 上 田中仁彦訳 国書刊行会.

Keywords: 聖ヤコブ 柱の聖母 サンティアゴ巡礼 サラゴサ
コンポステーラ